

四国・水こぼれ話

Water Information Saloon Shikoku

談話室 Vol. 74

『おきよ池物語』と 『人と水が出会う郷（くに）』

愛媛県 伊予市長

なかむら たすく
中村 佑



伊予市は、古くから湯水に悩まされてきた地域であり、田畑に水を供給する『ため池』が数多く造られています。その『ため池』にまつわる昔話を紹介します。

大洲藩六代藩主 加藤泰衝（やすみち）の時代のことです。現在の伊予市双海町上灘の岡地区を中心とする日の地（ひのじ）部落は、連日の日照りに苦しんでおりました。

藩主泰衝は前藩主泰温（やすあつ）の遺子である泰武（やすたけ）の乳母を探していたのですが、温厚で忠実その上にたいへん思いやりの心の深い、日の地部落の『おきよ』のことを聞き及び、さっそく『おきよ』をお召しかかえになりました。

泰武が6才になった頃、藩主泰衝は『おきよ』の働きをたいへんに褒め称え、郷里に帰るための暇（いとま）を与えることにしました。また、『おきよ』は「願い事があるならば、遠慮なく申してみよ。」とお言葉までいただきました。

いろいろと考えた『おきよ』は「私の郷里、日の地部落には水が少なく、わずかの日照りにも困るありさまです。村人達の難儀を救うために池を造っていただきたいのでございます。」と申しました。藩主は感心し、「郷里を思い百姓を案ずる

とは、実に見上げた心がけである。」と力強くうなずかれました。

さっそく東峰に池を造ることが決まり、それから数年の年月をかけ、農民たちの懸命の努力により、池が造られました。

それから二百年間にわたって、この東峰からずっと下の灘町まで川に沿った田畑を潤したこの池は、『おきよ池』と呼ばれ、今も豊かな水をたたえています。

こうした先人達の努力、苦勞に思いをはせながら、『ため池』を大切に守り、伊予市の基盤産業である農業を受け継いでいきたいと考えています。

また、水は、農業をはじめ産業の源であるばかりでなく、人の生活、更には命の源です。水環境に対する意識向上により、水質環境保全が重要な課題となっています。

本市では、『ひと・まち・自然が出会う郷（くに）』という将来像を実現するために、『人と水が出会う郷（くに）』再生プランを策定しました。汚水処理施設の整備を通して、自然との共生・調和がとれた、いつまでも住み続けたいまちづくりを進めていきたいと思ひます。



「おきよ池」（東峰池）
国道 56 号沿い、犬寄峠付近にあり、運転しながら間近に見ることができます



「おきよ池」下流
大切な河川を守るため、地元の人々が定期的に清掃を行っています